

水の文化書誌 27

《愛知用水の軌跡》



古賀 邦雄

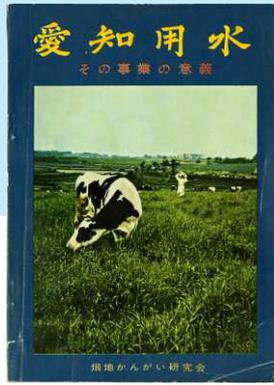
こがくにお
水・河川・湖沼関係文献研究会
1967年西南学院大学卒業
水資源開発公団
(現・独立行政法人水資源機構)に入社
30年間にわたり
水・河川・湖沼関係文献を収集
2001年退職し現在、日本河川開発調査会
筑後川水問題研究会に所属
2008年5月に収集した書籍を所蔵する
「古賀河川図書館」を開設
URL: <http://mymy.jp/koga/>

(遙かなる木曾の谷間の牧尾ダムみ
なもとの水は田に張られたり) (志水
孝)。この歌は、志水孝著『歌集
愛知用水』(自費出版2006)に所収
されている。作者は愛知県日進市在
住、愛知用水土地改良区の組合員、
農民作家である。早魃や飲み水の不
足に悩まされてきた知多半島の人た
ちは、久野庄太郎、浜島辰雄らによ
って昭和23年愛知用水建設運動を開
始した。愛知用水は木曾川上流に水
源となる牧尾ダムを築造し、岐阜県
から愛知県の尾張東部の平野及びこ
れに続く知多半島一帯まで水路を通
し、農業用水、水道用水、工業用水

を供給するものである。昭和30年か
ら昭和36年にかけて愛知用水公団
(現・独立行政法人水資源機構)で施工さ
れた。戦後間もないころの我が国は、
すべての物資が不足し、勿論水も食
糧もエネルギーも不足していた。そ
の愛知用水の完成まで決して平坦な
道のりではなかった。建設中、昭和
34年9月伊勢湾台風に遭遇。殉職者
も出た。完成後も昭和59年9月に発
生した長野県西部地震により、牧尾
ダム湖に大量の土砂が流入した。さ
らに新たな都市用水の需要増加及び
水路等の老朽化も顕在化する。しか
しながら、その都度これらの難題に

対処してきた。愛知用水の軌跡を追
ってみたい。
天水や溜め池に頼っている地域は、
水不足に悩まされ、水さえあれば、
水さえ引ければ、との願いは強い。
知多半島の農民たちには木曾川から
の導水が悲願であった。愛知県内
に既に、矢作川からの明治用水が通
水しており、安城市、豊田市、岡崎
市などは安定的に農業用水などの供
給体系ができ上がっていた。明治用
水のように知多半島にも水が流れて
きたら、と思うのも当然のことだっ
た。愛知用水建設運動の中心人物は
農民久野庄太郎と安城農林学校教員
浜島辰雄であった。浜島辰雄編著
『愛知用水と不老会』(財団法人不老会
2005)、愛知用水土地改良区編・
発行『愛知用水土地改良区五十年の
歩み』(2002)には、その建設活
動が描かれている。この二人は、木
曾川からの導水に関して意気投合し
て早速水路の現地踏査を行ない、
「愛知用水概要図」を昭和23年8月に
作成し、それを携帯、掲示に便利な
ように軸装にした。その図には関係
市町村4市48カ町村、導水路延長1
20km、水源は滝越、丸山そのほか
に4億㎡を貯める計画である。現・
愛知用水路線とほとんど変わらない。
その図でもって、農村同志会のメン
バーと各市町村に、浪曲師梅ヶ枝鶯
の浪曲で人を集めながら、愛知用水
建設運動を展開したが、木曾川下流
用水組合の木津、宮田、羽島から猛
烈な反対陳情が愛知県農地部などへ
出てきた。それにも挫けずに、昭和
23年12月吉田茂首相、佐藤栄作官房

長官に陳情し、建設の了解を得た。
この陳情について、高崎哲郎著『水
の思想 土の理想 世紀の大事業 愛知用
水』(鹿島出版会2010)で、次のよ
うに描かれている。「久野は挨拶をし
たのち、机に大地図を広げて説明を
した。自信に満ちた語りと表情だっ
た。首相からは『食糧の増産になる
か。労働者はどのくらい使うのか』
と相次いで質問が投げられた。『米の
増産になります。もちろんです』吉
田は、腕を組んで耳を傾けた。五分
間だけという約束の時間は、またた
く間に過ぎ四十分にもなった。吉田
は大声をあげた。『食糧増産、失業対
策、よいではないか!』農民の熱意
が通じ、首相吉田は大声をほり上げ
て協力を約束した。異例のことであ
った。敗戦国日本の国土総合開発が
急がれたところであった。大規模公共
事業を最優先と考えていた吉田には
愛知用水計画は最高の事業の一つに
思えたに違いない」
昭和30年愛知用水公団が発足し、
施工が始まった。愛知用水の水源地
ムとして、藪原、滝越、二子持、丸
山の候補地が拵がったが、最終的に
は牧尾橋地点に決着する。また、ダ
ム型式も重力式コンクリートダムか、
ロックフィルダムか、日米間におい
て意見が分かれたが、ロックフィル
ダムに落ち着いた。牧尾ダム、兼山
取水口、三好ダム、東郷ダム、松野
ダム、そしてそれらを連結した水路
の完成まで、人的な確保、予算の確
保、土地関係者の説得、さらに技術
の対応には、大変な労苦が伴った。
その技術の書として、愛知用水公団



編・発行『愛知用水技術誌 ダム編』、同『愛知用水技術誌 幹線水路編』、同『愛知用水技術誌 支線・開墾および畑かん編』、同『愛知用水技術誌 仕様書および計画書編』（すべて1996）が刊行された。また、同編・発行『愛知用水 その建設の全貌』（1996）は、世界銀行からの借款をはじめとし、アメリカとの技術提携、牧尾ダムの突貫工事、沈みゆく村々、可児川サイホン工事、高蔵寺サイホン工事、東海道線橋梁新設工事の写真集である。また、愛知用水事業の全体を捉えた『愛知用水公団・愛知県編・発行』『愛知用水史』、同『愛知用水史 資料編』（ともに1968）がある。この書に、愛知用水と民主主義について、「愛知用水の発起者達は、この用水を真に民衆のものとして、民衆の自覚による民主的な力によって実現したいと希望している。この用水は自分達が自分たちの手で作ったものであり、その保存の責任も自分達の上にあるのだという気持ちで民衆の間に存在する場合には、その用水は最も有効に利用せられ、又最も大切に愛護せられるのである。民衆自身の間から民主的にこの用水の開墾を達成せんとする運動を起こすことが出来たならば、この用水は必ず実現する。これが最初に発起者が持った考え方であった。民衆ほど強いものはない。一人一人の民衆は弱い、組織化せられた民衆は強い。組織化するために一定のハッキリした目標と、その目標に向って民衆を伴っていく中心人物が必要である」と論じる。この世紀の大事業を成し

得た根底には、このような民主主義の理念が流れていた。昭和36年9月愛知用水事業は完成し、知多半島まで通水が開始された。愛知用水の兼山取水口には、濱口雄彦総裁による「この木曾の水は、百年の夢をうつつに愛知用水として濃尾の野をうるおす ゆくてに幸多かれ」の碑が、木曾川の清流にのぞんで建っている。幸多かれと流れていた水は、昭和59年9月14日長野県西部地震が起こり、牧尾ダムに大量の土砂が入り込み、その通水に支障をきたした。その復元工事として、平成8年3月から「愛知用水二期事業牧尾ダム堆砂対策工事」がなされ、平成19年3月に竣工した。また、通水から20年を経て、新たな都市用水の需要増加と水路等の老朽化が進んだ。これに対処するために新たな水源として、木曾川上流に味噌川ダム、阿木川ダムが建設された。老朽化に対しては「愛知用水二期事業」として、水路施設の全面改築が昭和56年度から平成16年度にかけて23年の歳月を費やして行なわれた。なお、これらの技術書として、独立行政法人水資源機構愛知用水総合事業部編・発行『愛知用水二期事業 牧尾ダム堆砂対策工事記録』（2007）、同『愛知用水二期事業工事誌 水路編』、同『愛知用水二期事業工事誌 水路施工例』（ともに2005）が刊行され、新たな施工技術が駆使された。水路改築においては、河川以外の水路でも自然に配慮した工法が採用され、生態保全について、名古屋水辺研究会編・発行『愛知用水 志段味開水路自然

環境モニタリング・フォローアップ業務 実績報告書』（2004）にまとめられた。名古屋水辺研究会代表 國村恵子は「用水事業という大きな仕事をする人達が守った、日本一小さなトンボ・ハッチョトンボの生命は、これからも滔々と流れる開水路とともに生きつづけることである。守ってくれて、ありがとう」と結んでいる。愛知用水の水利用の変遷を追ってみたい。愛知用水の受益地は、昭和30年代の初めころは、製造業を中心とする産業が盛んであったが、昭和36年愛知用水施設による供用開始を機に二、三次産業も一段と加速した。愛知用水の年間使用量は14億m³が4.6億m³と、実に3.3倍に増加した（昭和38年度と平成17年度比較）。一方、農業用水と都市用水（水道用水・工業用水）は農65%、都35%であったものが、農23%、都77%と逆転した（同年度比較。愛知用水地域の農業産出額は約255・7億円が664・1億円、特に果実は約12・8億円から約75・8億円に、花は約26億円から約75・5億円に増加した（昭和38年度と平成16年度比較。水道用水の給水人口も20万人から173万人と増加（昭和38年度と平成16年度比較。工業用水は、鉄鋼業をはじめ化学工業等諸産業の水需要に対応している。通水後、企業進出は著しく、約3259億円であった愛知用水関係市町製造品出荷額は、3兆6000億円に達した（昭和38年度と平成16年度比較）。このように、久野庄太郎が始めた愛知用水建設運動はここに大きく盛り、中部圏の経

済と文化の発展の大基盤を創り上げた。畑地かんがい研究会編・発行『愛知用水 その事業の意義』（1996）で福田仁志は「愛知用水が事業を以って、かんがい技術史上画期的であるのは、湿潤地帯における水管理と配水を2万町余という一大団地の水田、畑のかんがいに伴う事業に対してである。この水操作上に来る困難さを克服することこそ、日本の農業土木技術者の努力に値する有意義な仕事と思いたい」と述べている。その土木技術を駆使して、こまかな水管理の運営がなされている。通水後の調査研究については、酒井正三郎編『愛知用水と地域開発』（東洋経済新報社1996）、愛知用水土地改良区編・発行『愛知用水土地改良区誌「研究編」』（2005）がある。残念なことだが、愛知用水事業建設中、56人の殉職者が出た。久野庄太郎はそのことを大いに悔やみ、「私が殺したようなものだ。私がかんな仕事を始めなければ、この人達は死ななかつた」と、嘆き悲しみ現場にひれ伏したという。佐布里池近くに、愛知用水神社、愛知用水水利観音を造り、その霊を弔った。さらに自ら献体することを決心し、「愛知用水不老会」を設立し、人々に献体を奨励した。世紀の大事業、ゆめの用水水から、平成23年9月30日をもって通水50周年を迎える。

〈生涯を愛知用水建設に命を懸けたり久野庄太郎〉（志水孝）

